

---

**真・恋姫十無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！(改悪？版)」**

日時々雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫†無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！（改悪？版）」

### 【Nコード】

N2814Z

### 【作者名】

日時々雲

### 【あらすじ】

ちよつと、どころではない環境で育ってきた、口の悪い主人公が頑張りのお話。彼の存在は、外史にどのような影響を与えるのだろうか。

（とあるサイトにて、投稿してたのに手を加えたものです）

## はじめに

この作品は、とあるサイト（名前出しは、一応止めておきます）で投稿していたものに手を加えたものです。

改良もあれば、改悪の部分もあつたりします。

初見ではわからないですから、問題はないのですが。

極力コメディにしたいですが、シリアスを含んじやいます。

まだまだ経験が足りないので、拙いです。

そして、原作キャラのキャラ崩壊が結構激しいです。

さらに、オリキャラも多数（10ぐらい？）存在します。

さらにさらに、主人公は（自重はしてますが）チートです。

最後に、アンチっばいのを含みます。

そんな要素が苦手、もしくは嫌いな方は、backでお願いします。

かなり長くなりそうですが、どうかお付き合い下さい。

## 第一話（前書き）

プロローグというやつ？？です。

## 第一話

昔、むかしはるか後漢末期。

ある所にある少年がいた。

容姿は悪くなく、むしろ世間一般から見れば良い方だと言えるだろう。

そのくせ着ている服はみずばらしく、貧しさだけで服が擦りきれてぼろぼろになっているとは言い難い格好である。  
そんな少年がいま、暗い暗い穴の中にいた。

「……………うん、冷たいし、かてえなあ。下が土だから当然といえば当然かあ？」

(土? あん?)

「なんでこんなところにいるんだっけか？」

さかのぼること数刻前…………

「……………、腹が、げ、限界だ！」

少年は森のなかをさまよい歩いていた。  
言わずともわかるであろう。

食糧調達の為である。

最後の食糧が尽きて数日が経っており、足元はふらつき、体力はもう限界だった。

「こんなことになるなら、最後の食糧をあの手でやらねりゃよかったぜ……。でも、ああも嬉しそうに食ってたし、しょうがねえか」

(やっぱり動物には優しくしないと、なあ。

動物愛護家たるもの、そうする義務があるぜ)

などと、独り言を呟きつつ、歩を進める。

「……って、楽観的になってる場合じゃねえ！ 僕……俺の生死に関わる問題だ！」

(まあ、別に俺がここでのたれ死のうが悲しむ人なんていないからいいんだけどな)

ヒステリックになつては、皮肉げに笑みを浮かべ、コロコロと表情を変えながら、さらに奥へと進んだ。

「おっと、あれは……」

すると、何故か地面から30〜40cmほど宙に浮いている(正確に言えば、吊るされている)林檎があった

「……やった！ す、数日ぶりの食糧だッ！ この際、なんで浮いてるかなんて気にしねえ！」

いつもの少年ならば、当然畏だと警戒したであろう。  
しかし疑ってかかる暇も惜しむほど、腹を空かせていた彼は何かに  
とりつかれたかのように飛びついた。  
この少年、馬鹿なのだろうか。

「いゝよっしゃあ！ うむ、では早速、頂きm……」

（あれ？

なんだこの浮遊感は。

……嬉しすぎて、天に召されてるとかか？  
洒落にならねえぞ！）

絶賛落下中であるのにそんなことを考えていられる辺り、結構余裕  
があるのかもしれない。

「まだ、まだ死にたくなああーいたっ！ ぐおおお……」

深くはないが、浅くもない穴底に尻から着地した少年は、急いで尻  
をさする。

「ケツがああああ！ ふう、結構痛いじゃないか……」

辺りに誰もいないのに 穴の中なのだから当然だ 平静を装う  
少年。

本当に馬鹿なのかもしれない。

「つか、痛いだあ？ はっ！ また、死に損なっただか」

少年は、小さく憎々しげに呟いた。

「しかし、まぬけだなあ、おい。しかも、若干深めで出れねえし。……ま、林檎食べて、寝ますかね」

見れば誰もが、猪を捕らえる為の罠である、と気付く罠に引っ掛かった状況でなお、楽観的だった。もう、馬鹿で良いのでは。

「う、……思い出しただけで、なかなか恥ずかしい」

(うん、これから気をつけよ。  
だがな作者、貶しすぎだろーが)

思い返した少年は、深く反省することにしたようだ。  
とりあえず、メタ発言は止めましょう。

「しかし、いい加減出ないと不味いな。……近くに助けってくれる人はいねえかなあ？」

期待はしねえが、な。

都合良くいるはずがないことをしりながら、そう声をもらした。

同じころ、ある少女もまた森の中にいた。

「初めて仕掛けた罫だったんだけど、うまくいったかな？」

初めてにしては上手すぎだわって伯母上様に言われたけど……大丈夫だよな？

そう小さく呟きながら、森深くに進んでいった。

「たしか、ここら辺に仕掛けたはず、なんだけどなあ……。」「森に入って早、半刻（一時間）。少女は、未だに見つけられないでいた。

「うーん、間違えたかなあ……。ん？」

「……思い……。けで、なか……。しい」

（声？が聞こえる……。捕まって騒いでるのかな？）

そう疑問に思い、そっちに足を運んだ。すると……

「近くに助けてくれる人はいねえかなあ？」

……そんな声が聞こえてきた

（うん、ここは十八番しかないよね

あ、どこで十八番なんて言葉を知ったかは、ひ・み・つ）

メタ発言は止めて欲しい。

「……」

はっきりと、自身の代名詞である言葉を、声高々に言い放った。

「って、何処にだよ！」

とツッコミつつも、内心は安堵と驚きで一杯だった

たしか朝方、森に入ったとき晴天だったはずなのに、ほとんど光が入ってこない。

すなわち、木が生い茂っていて、かつ、かなり長く歩いていたはずだから森深くにきている……。  
確実に誰もいなくね？

と、判断していたので、当然と言えば当然である。

思考に耽っている少年を尻目に、少女はひょっこりと顔を穴へと出し、口を開く。

「ここだけ」

至極当然、単純明快なことであったのに、何故ツッコんでしまったんだろう、と少年かは少し後悔した。

「どうかしたのー？」

「いや、少し考え事をね。えと、この穴から出たいんだけど、若干深くて出れないから手伝ってくれないか？」

「うん、いいよ　ちょっと待っててね」

待つこと、ほんの一時  
植物のツル？が、少年の元に落ちてきた。

「それに掴まってね。案外丈夫で切れないから安心してね」

「ありがとう」

少年はツルを何度か引つ張り、強度を確認すれば、本当に一人を吊るしても切れないだろう、と思うほど丈夫だった。若干の警戒をしつつ、それをつたってよじ登ると、穴から出たところにさっきの少女がいた。

（さっきは光が少なかったから見えなかったけど、かなり可愛いなあ、おい）

と、少年が内心想うほどの頭に美のつく少女だった。

「ホント助かったよ、ありがとう。ええっと」

「たんぽぽはねえ、馬岱ってゆうの！」

これが少年と馬岱との出会いであった。

そして、後に、彼の少年は親友にこう語った。

「この頃かな、俺の掘った深い穴に光が射し込み始めたのは」と

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2814z/>

---

真・恋姫＋無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！（改悪？版）」

2011年12月9日23時54分発行